

清末中国知識人の近代日本認識  
——「任侠」を中心に——

The Intellectuals' Modern Cognition on Japan in the Late Qing Dynasty:  
Focusing on chivalry

孫 瑛鞠  
SUN, Yingju

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第46号 2018年11月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.46 2018

# 清末中国知識人の近代日本認識

## — 「任侠」を中心に —

孫 瑛鞠

はじめに

### I. 黄遵憲による「任侠」思想の受容

1. 日清戦争前、中国人の対日認識及び『日本国志』の普及
2. 黄遵憲の幕末志士観
3. 黄遵憲と日本漢学者との交遊

### II. 維新派による「任侠」思想の展開とその性格

1. 維新派による「任侠」思想の展開
2. 清末における「任侠」思想の性格

おわりに

はじめに

清末中国人の日本研究の代表作という、まず思い至るのは黄遵憲の著した『日本国志』であろう。この書は計40巻、50万字、12種の志からなり、政治、法律、軍事、風俗等多方面にわたって、日本の歴史を紹介するだけではなく、明治維新によって急速に近代化した日本の経験を紹介したものであり、中国で初めて体系的に著された日本に関する書物であると評価されている<sup>1</sup>。

『日本国志』が清末の維新変革の具体案の着想、及び実施に果たした役割については、すでに多くの指摘がなされている<sup>2</sup>。しかし、『日本国志』に見える幕末志士観の中国知識人に対する影響については、十分な考察がなされていない。当時の知識人、特に康有為ら維新派は、日本の幕末志士を中国の歴史上に存在した「任侠」と捉え、少数の「任侠」によって改革を成功させることができるといふ維新観を生じさせた。この「任侠」思想がどのような特質を持っているか、また、この思

<sup>1</sup> 鄭海麟『黄遵憲与近代中国』（生活・読書・新知三聯書店、1988年、198頁）。

<sup>2</sup> 例えば、『日本変政考』第一巻から第八巻における、明治維新の制度改革に関わる論述の多くが、『日本国志』から取られていることを、鄭海麟が指摘している。（前掲『黄遵憲与近代中国』、273-275頁）。また、康有為だけでなく、『時務報』經理（社長）の汪康年や、康門の梁啓超、麦孟華ら、それに湖南の改革派学者皮錫瑞らも、変法改革の具体案の着想を『日本国志』より直接間接に得ていたという。（村田雄二郎「康有為と『東学』：『日本書目志』をめぐって」『清末中国と日本：宮廷・変法・革命』、研文出版、2011年、257-258頁）。

想が知識人の日本認識にどのような影響を与えたかという思想史上の問題を検討する必要がある<sup>3</sup>。「任侠」思想の問題の解明は日清戦争後の中国知識人の日本認識、及び維新観を明らかにするために欠くことができないものと考えられる。

そこで本稿では、まず黄遵憲の『日本国志』の中に現れた幕末志士が日清戦争後の知識人たちに「任侠」として受け入れられた経緯を明らかにする。そして、「任侠」思想はどのように維新派によって中国で広められたのかについて考察する。そのうえで清末の「任侠」思想の性格、及びそれがもたらした中国知識人の近代日本認識の問題を検討してみたい。

## I. 黄遵憲による「任侠」思想の受容

### 1. 日清戦争前、中国人の対日認識及び『日本国志』の普及

中国は日本を認識した最初の国だと言われている。紀元1世紀に完成した『漢書』及び紀元3世紀に作られた『三国史』の中に日本に関して明確な記載がある。それらは日本の古代史を研究するための最も重要な文献史料とされてきたが、それ以後中国人は中華思想と華夷秩序に影響され、日本に対する認識の進展はきわめて緩慢であった。清朝の半ばまでの中国人は日本に関する知識が非常に乏しかった。

アヘン戦争後、何人かの開明的な知識人が世界に目を向けはじめ、世界各国の歴史地理に関する書を著した。しかし、彼らの関心は中国が敗れた西欧列強にあり、東亜の隣国である日本は重視されていなかった。例えば、当時の中国では名著と言われた魏源の『海国図志』(1842)と徐繼畲の『瀛環志略』(1849)における日本に関する内容はほぼ前人の記載を踏襲するものであった。

明治維新変革直後の1870年、柳原前光使節団が来華した時、清朝の官僚は初めて日本の明治維新のことを知るようになった。1871年の「日清修好条規」調印を経て、1877年、日本に清国公使館が設置された後、中国の官僚や文人が次々と日本を訪れるようになった。彼らは日本各地を遊覧して日本人と広く往来し、多くの旅行記や詩歌を書いた。それらの著書の多くは、明治維新後の日本の発展に賞賛を表明しているが、明治維新に対して必ずしも肯定的な立場ではなかった。

<sup>3</sup> 清末の「任侠」思想に関する中国の先行研究は少ない。日本の幕末志士に対する崇拜の影響があることが簡略に言及されるのみで、「任侠」思想は少し後の時代に中国社会で提唱された尚武精神、武士道精神と同一視されている。例えば、劉保剛「試論近代中国的俠義精神」(『鄭州大学学报』哲学社会科学版2、2013年)、李斌瑛「晚清維新派与日本志士精神」(『外国問題研究』4、2014年)などが挙げられる。日本においては、小林武は清末の「任侠」が先秦の任侠と違い、個人、家、郷村といった閉鎖的意識を超えて普遍的な国家意識を形成しようとする歴史的連関を持つことを論じている。(小林武「中国近代の自我についての覚書：清末の任侠(結)」、『京都産業大学日本文化研究所紀要』1、1995年)。そして、「侠」への関心が清末中国知識人に顕著な現象であることが言及されている(島田慶次『隠者の尊重』筑摩書房、1997年、219頁。また、同『東洋史研究叢刊59 中国思想史の研究』京都大学学術出版会、2002年、56頁)。著者も既発表論文において、清末「任侠」思想について基礎的な検討を行っている。「梁啓超の近代国民思想の形成：『任侠』から『新民』へ」(『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』42号、2016年)、及び「清末、中国人日本留学生における国民意識の形成：蔡鐸の『軍国民』主張について」(『文化共生学研究』16、2017年)。

例えば、1879年に来日した王韜は「扶桑游記」の中で、「西洋のやり方を倣うのは、今日に至って最も盛んだといえるが、実はそれはまだ上面である。倣う必要がないものを倣ったこともあれば、倣ってはいけないものを倣ったこともある。また、その欠点はやり方がせっかちすぎて、倣い過ぎだ」といっている<sup>4</sup>。また、1880年に訪日した李筱圃は「日本紀遊」の中で、日本は維新改革後、「遠来の西洋人を拒絶できないばかりではなく、極力西洋のやり方をならった結果、国は日ましに貧しくなり、人民から多額の税金を苛酷に取り、民は再び徳川氏の深い仁愛を懐かしんでいる」と言っている<sup>5</sup>。また、明治維新後の日本の政治経済状況を分析し、日本には重大な政治経済的危機が潜在していて、明治維新は失敗するだろうという言論もあった<sup>6</sup>。

1880年代以後、駐日公使及び日本視察のために派遣された官僚は、日本に対する認識を深めた。例えば、初代駐日公使何如璋は赴任日記『使東述略』（1877）を著した。第二代駐日公使黎庶昌の随員である姚文棟は『日本地理兵要』（1884）を書いた。また、1887年、明治維新後の日本を視察するために傅雲龍と顧厚焜が派遣された。報告書として、傅雲龍が『遊歴日本図経』（1889）を、顧厚焜が『日本新政考』（1888）を著した。

これらの著作は、中国人に日本を理解させるために豊富な史料を提供したが、明治維新の制度改革について必ずしも肯定的な立場に立っていなかった。例えば、何は、明治維新後にあらゆる面で西洋化した日本社会で生じた輸入超過、紙幣の過度な発行などの問題を提起し、維新が成功するかどうかについて疑念を抱いていた<sup>7</sup>。また、傅は日本が「西洋を倣ったが、西洋には及ばない。変えるべきものを変え、変えてはいけないものも変えた」と述べている<sup>8</sup>。顧は「もし法律、典章を捨てれば、日本の福だといえるのか」と述べている<sup>9</sup>。彼らのこのような見方は、19世紀後半に中国で展開された洋務運動が唱えた「中体西用」論を超えていないと考えられる。彼らは明治維新後に作られた学校や、鉄道・銀行・電信など、清朝の支配体制にとって有用なものを「用」として認めるが、

<sup>4</sup> 王韜「扶桑游記」（鐘叔河編『走向世界叢書3 日本日記、甲午以前日本游記五種、扶桑游記、日本雜事詩（広注）』、岳麓書社、2008年、453頁）。原文は以下の通り。

「余謂倣西法、至今日可謂極盛；然究其實、尚屬皮毛。并有不必學而學之者；亦有斷不可學而學之者。又其病在行之太驟、而摹之太似也。」

<sup>5</sup> 李筱圃「日本紀遊」、前掲『走向世界叢書3 日本日記、甲午以前日本游記五種、扶桑游記、日本雜事詩（広注）』、172頁。原文は以下の通り。

「今則非但不能拒絶遠人、且極力効用西法、国日以貧、聚斂苛急、民復謳思徳川氏之深仁厚澤矣。」

<sup>6</sup> 厥名「日本瑣志」（王曉秋『近代中日啓示録』、北京出版社、1987年、78頁）。

<sup>7</sup> 何如璋「使東述略」、前掲『走向世界叢書3 日本日記、甲午以前日本游記五種、扶桑游記、日本雜事詩（広注）』、97、105頁。

<sup>8</sup> 傅雲龍「遊歴日本図経余記」、前掲『走向世界叢書3 日本日記、甲午以前日本游記五種、扶桑游記、日本雜事詩（広注）』、191頁。原文は以下の通り。

「効西如不及、当変而変、不当変亦変。」

<sup>9</sup> 顧厚焜『日本新政考』（劉雨珍・孫雪梅編『晚清東遊日記彙編 日本政法考察記』、上海古籍出版社、2002年、自序）。原文は以下の通り。

「一旦學法度、典章一一棄若弁髦、是得謂是邦之福哉。」

制度改革や文化の西洋化など「体」の改革は認めないのである。しかし、彼らは極端な守旧者ではなかった。むしろ、当時の中国官僚としては開明的な部類に属していた。

上に挙げた官僚たちの著作は清国の総理各国事務衙門（1861-1901）によって刊行された。総理各国事務衙門は清朝の外交や洋務（鉱山や鉄道に関する政策等）を管轄するために設立された官庁であり、総署、訳署とも略称される。以下は総署と呼ぶ。総署は外国に官僚を派遣し、彼らに各国の地理や風土人情、特に政情、外国との交渉状況に関する報告を提出させることを規定している。そのため、外国に派遣された官僚たちは日記を含め、総署に詳細な報告書を提出した。総署はこれらの報告書、日記を審査した後、そのうちの重要なものを刊行し、世に広めていた<sup>10</sup>。従って、総署によって刊行された日本関係の著書には、当時の清国官僚や知識人の間に広がっていた明治維新に対する代表的な見方が反映されているといえよう。

日清戦争における中国の惨敗によって、「中体西用」論の限界が認識され、小国であった日本が如何にして急速に近代化を成し遂げ、清朝の軍隊を破るまでに成長したのか、という関心が喚起された。直後、歴史に登場したのは康有為・梁啓超を中心とする維新派であった。彼らは「強敵を以て師と為す」というスローガンを掲げ、明治維新後の日本を改革の手本とし、光緒皇帝の支持を得て、変法運動を展開した。そこで、日本研究書として最も評価され、維新派に変法の具体案を提供したのは黄遵憲の著した『日本国志』である。総署章京であり、黄遵憲の友人でもあった袁昶は、この書がもっと早く世に流布していたら、軽々しく日本との開戦が唱えられることはなかったし、敗れて二億の賠償金を払うこともなかった、というほどであった<sup>11</sup>。また、梁啓超は「日本国志後序」において、中国人が日本の事を知らない原因は、黄遵憲が謙遜して『日本国志』を脱稿して十年経っても世に出さないことにあると述べ、『日本国志』を高く評価した<sup>12</sup>。

黄遵憲は字を公度といい、1848年広東省の嘉応州に生れた。父は江西の知府を務めた。1876年、黄遵憲は郷試で挙人になった。その翌年駐日公使何如璋の参事官として来日し、1882年正月、サンフランシスコ総領事に転じて日本を離れた。彼は「日本に居ること二年にして、やや日本文を習い、その書を読み、その士大夫と交遊して、遂にその編集様式を決め」、『日本国志』を執筆し始めた

<sup>10</sup> 呉福環『大陸地区博士論文叢刊88 清季總理衙門研究』（文津出版社、1995年、6、72頁）。

<sup>11</sup> 黄遵憲「三哀詩三首・一袁爽秋京卿」（黄遵憲著、陳錚編『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』上、中華書局、2005年、177頁）。原文は以下の通り。  
「馬関定約後、公來謁大吏、青梅雨條條、煮酒論時事。公言行篋中、携有『日本志』、此書早流布、直可省歲幣。我已外史達、人實高閣置。」

<sup>12</sup> 梁啓超「日本国志後序」、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』下、1565頁。原文は以下の通り。  
「中国人寡知日本者也。黄子公度撰『日本国志』、梁啓超讀之、欣憚詠嘆黄子：乃今知日本、乃今知日本之所以強、頼黄子也；又瀝憤責黄子曰：乃今知中国、知中国之所以弱、在黄子成書十年、久謙讓、不流通、令中国人寡知日本。」

が<sup>13</sup>、その後、政務が多忙で、1887年の夏ようやく完成した。しかし、この著書はすぐに刊行できなかった。黄は1888年に『日本国志』を総署に提出し、世に出そうとしたが、日本の明治維新を手本として中国の政治改革を行うべきであるという同書の主張は、総署に認められなかった。このため、『日本国志』は長い間高閣に束ねられたままで、袁昶が取り出して読んだだけであったという<sup>14</sup>。その後黄はこの書を刊行できる民間書局を探したが、1890年、仕事でヨーロッパに向かったこともあり、世に出す余裕はなかった。1895年、日清戦争のさなか、黄遵憲はシンガポール総領事の任を終え中国に戻った。同年、民間書局である広州羊城富文齋は『日本国志』を発行した。『日本国志』は皮肉にもこの敗戦によってようやく脚光を浴びるようになり、その後多くの書局は争って『日本国志』を刊行し、一世を風靡した<sup>15</sup>。

このように、『日本国志』は1887年に書き上げられたが、実際に中国で広く読まれ始めたのは日清戦争後であった。では、『日本国志』は、日本の明治維新が成功した要因をどのように捉えていたのだろうか。次節で見ることにしたい。

## 2. 黄遵憲の幕末志士観

黄遵憲の著作は他に『日本雑事詩』、『日本国志』、『人境廬詩草』があるが、彼が最も精力を尽くしたのは『日本国志』であった。この書は従来の歴史書でいう「志」という書式によって12種の方面にわたって日本を記述している。このため、通常の縦の歴史より横の歴史、すなわち明治維新後の日本をとりわけ大きく扱っている。黄遵憲は『日本国志』の「凡例」で、「ここに撰録するものは皆、今を詳しくして古を略し、近き時代を詳しくして遠き時代を略して、西洋のやり方に渉るものは、特に詳しくして、その適用を期するものである」と述べている<sup>16</sup>。よって黄遵憲は『日本国志』を著した目的は、明治維新の経験を紹介し、中国の改革に参考を供しようとしたものだと考えられる。

また、黄遵憲は自ら「外史氏」と称し、『日本国志』の各志のはじめ、また場合によっては途中で自説を展開した<sup>17</sup>。これらの論説は合計5万字もあり、時事論ないし中国改革の必要性の主張が殆どを占める。この「外史氏曰」によって、彼の思想の一端を窺うことができる。この書の第一巻から三巻までの『国統志』は日本の政治沿革史である。黄は「国統志一」の最初の「外史氏曰」に

<sup>13</sup> 黄遵憲「日本国志叙」、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』下、819頁。原文は以下の通り。「既居東二年、稍稍習其文、讀其書、与其士大夫交遊、遂發凡起例、創為『日本国志』一書。」

<sup>14</sup> 李長莉「黄遵憲『日本国志』延遲行世原因解析」（『近代史研究』、2006年第2期）。

<sup>15</sup> 1897から1898年までの間、広州羊城富文齋、浙江書局、上海圖書集成印書局などの書局が『日本国志』を刊行した。前掲鄭海麟『黄遵憲与近代中国』、166-168頁。

<sup>16</sup> 「凡例」、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』下、821-822頁。原文は以下の通り。「今所撰録、皆詳今略古、詳近略遠。凡牽涉西法、尤加詳備、期適用也。」

<sup>17</sup> 黄遵憲は『日本国志』の中で自らを「外史氏」と称する理由を以下のように述べている。前掲「日本国志叙」、819頁。「窃伏自念今之參贊官即古之小行人、外史氏之職也……窃不自揆、勒為一書、以其体近于史志、輒自称为外史氏、亦以外史氏職在取掌、不敢居述作之名也。」

において、明治維新の出現の背景は「(幕府が) 久しく覇政を盗み、民衆の不满を招き、外辱を受け続け、内部の衝突が多かった」ことにあると言ひ、明治維新を成功させた要因は「二三豪傑が勢いに乗って、幕府の政権を転覆させ、王室を尊び、政権を各藩から上に返させたゆえ、王政復古を達成し、国家維新が勃興したのである」と述べている<sup>18</sup>。黄はまた、「日本国志卷三」の「外史氏曰」では、「幕府の滅亡は実に処士によるものである」と説き、「浮浪処士」は「尊王攘夷」を唱え、憤然として幕府を敵とし、遂に幕府を転覆させたと言ひながら、「尊王」にせよ、「攘夷」にせよ、最終の目的は幕府を転覆させることだと述べている<sup>19</sup>。

このように、黄は明治維新の成功は幕末志士(豪傑、処士)によって成されたと強調している<sup>20</sup>。注意すべきは、黄は『日本国志』において、「尊王攘夷」を唱えた幕末志士の思想的基礎は『春秋』であると主張している、ということである。黄は「国統志三」の「外史氏曰」に「徳川氏は詩書の恩沢を以て、兵戈の気を無くした。然るに幕末に至って禍患に変え、遂に『春秋』の尊王攘夷の説によって滅びた」という<sup>21</sup>。黄はまた「學術志一」において、「外船砲撃の事件が起きてから攘夷を掲げることが始まった。繼いで尊王を掲げて攘夷するようになり、そこで、尊王を掲げることが始まったのである。これらは皆『春秋』の論旨を借りたものであり、それによって明治中興の功をなした。これはまた日本が漢学を崇めた効果でもある」と述べている<sup>22</sup>。実は黄はずっと前からこのような見方を持っていた。彼は1880年、藤川三溪の『春秋大義』のために書いた序に、「『春秋』のこと、尊王攘夷より重要なものはない。中国の知識人は皆知っている。この考えをおし進めて日本で実行すれば、極めて有用であり、速やかに効果が上がる」と述べ、幕末志士たちは犠牲を恐れず、勇敢に幕府と立ち向かうため、多くの志士を発奮させ、遂に幕府を転覆したと主張している<sup>23</sup>。これらのことから、黄遵憲は、尊王攘夷を起こした幕末志士の思想的基礎は幕府が唱えてきた儒学に

<sup>18</sup> 「国統志一」、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』下、892頁。原文は以下の通り。なお、括弧は筆者による、以下同様。

「覇政久窃、民心積厭、外辱紛乘、内訌交作、于是二三豪傑乘時而起、覆幕府而尊王室、拳諸侯封建之權拱手而歸之上、卒以成王政復古之功、国家維新之治、蒙泉剝果、勃然復興。」

<sup>19</sup> 「国統志三」、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』下、929頁。原文は以下の通り。

「故論幕末之亡、實亡于処士……浮寄孤懸、不足顧惜。于是奮然一決……前此之攘夷、意不在攘夷、在傾幕府也；後此之尊王、意不在尊王、在覆幕府也。」

<sup>20</sup> このほか、『日本雜事詩』と『人境廬詩草』には幕末志士の高山彦九郎、蒲生秀実、佐久間象山、吉田松陰、月照らを称える詩が収められている。

<sup>21</sup> 「国統志三」、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』下、929頁。原文は以下の通り。

「徳川氏以詩書之澤、銷兵戈之氣、而其末流禍患、乃以『春秋』尊王攘夷之説而亡、是異逢蒙学射、反開弓而射羿乎？」

<sup>22</sup> 「學術志一」、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』下、1404頁。原文は以下の通り。

「逮外船事起、始主攘夷、繼主尊王以攘夷、始主尊王、皆假借『春秋』論旨、以成明治中興之功、斯亦崇漢学之效也。」

<sup>23</sup> 『春秋大義』序、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』上、264頁。原文は以下の通り。

「『春秋』之事、莫大乎尊王攘夷、漢土之讀書者尽知之。而推而行之日本、其致用也遠、其收効也尤速。」

あると考えたことが分かる。

ここで、黄遵憲の西洋学に対する見方に少し言及したい。「西洋の学問の源は恐らく墨子から生まれたのであろう。人がそれぞれ自主権利を持っていると彼らがいうのは則ち墨子のいう尚同であり、隣人を愛すること己を愛するようにせよと彼らがいうのは則ち墨子のいう兼愛であり、神を敬い靈魂を護ることを彼らがいうのは則ち墨子のいう天を尊び、鬼を敬うことであり、機械の精緻、攻撃と守備の能力に至っては、墨子のいう備功備突、木製の飛ぶ鳥の残余のようなものであり、さらに格致（物理と科学の総称）の学問の源はすべて『墨子・経』上下篇から生まれた……日本の学術はまず儒から始まり、墨へと至ったのである」と述べている<sup>24</sup>。このように、黄遵憲は西洋の学問の起源は墨子だと解していた。

以上から分かるように、黄遵憲は『日本国志』において、明治維新の成功は少数の幕末の志士に負うところが大きいと強調している。また、黄は日本の幕末志士の提唱した「尊王攘夷」の思想的基礎となったのは中国の『春秋』であると主張し、西洋学の源は墨学から生まれたと考えた。つまり、黄は日本の学にせよ、西洋の学にせよ、それらはいずれも中国の経書から生まれたと主張したのである。このような黄の考えは清末の中国知識人に特有な思考様式だといえる。彼らは「中華文化」に誇りを持ち、如何なるものに対しても中国固有なもので解釈しようとした。それゆえ、黄の幕末志士に対する認識及び思考様式は、当時の知識人たち、特に康有為、梁啓超、譚嗣同、唐才常らの維新派にとって受け入れやすかったと考えられる。すなわち、少数の志士が国家の維新を成功させることができるという彼らの維新観を決定づけただけでなく、その幕末志士の精神を中国古来の固有なものから探ろうとする思考様式をも生じさせたのである。

### 3. 黄遵憲と日本漢学者との交遊

黄遵憲と同時期に日本に派遣された中国の官僚の中で、明治維新が成功した原因について、黄遵憲と同じく日本の幕末志士の役割を強調する人がいた。例えば、何如璋は『使東述略』において、「憂時の士は幕府の政令が現実から乖離し、国を安定させられず、外辱を防ぐこともできないと考えたため、尊攘を唱えた。諸国の浮浪は一斉にこれに呼応し……武権は日に日に弱くなった。有能な人材は勢いに乗って、その変を制し、公室を強め、私門をふさぎ、封建を廃し、郡県にあらため、数百年の積弊を清算した」と述べている<sup>25</sup>。黄遵憲らのこのような認識は当時の明治日本、及び彼ら

<sup>24</sup> 「学術志一」、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』下、1399-1400頁。原文は以下の通り。  
「余考泰西之学、其源蓋出于墨子。其謂人人有自主權利、則墨子之尚同也；其謂愛汝隣如己、則墨子之兼愛也；其謂獨尊上帝、保汝靈魂、則墨子之尊天明鬼也。至于機械之精、攻守之能、則墨子備攻備突、削焉能飛之緒餘也。而格致之学、無不引其端于『墨子・経』上下篇……日本之学術、先儒而後墨。」

<sup>25</sup> 何如璋『使東述略』、前掲『走向世界叢書3 日本日記、甲午以前日本游記五種、扶桑游記、日本雜事詩（広注）』、104頁。原文は以下の通りである。  
「憂時之士、謂政令乖隔、不足固邦本、御外辱、倡議尊攘。諸国浮浪、群起而和之……武権日微；而一二幹濟之材、遂得乘時以制其變、強公室、杜私門、廢封建、改郡県、拳數百年積弊……」



と交遊した日本人からの影響を抜きにしては考え難い。

維新政府の成立に伴う文明開化運動は、その昂揚によって自由民権運動へと発展していった。江戸時代に学問の正統と見なされた漢学は、和漢洋の学問の単なる一分野へと転落し、しかも陳腐な学問と世人にうけとめられる存在へと堕ちた<sup>26</sup>。このような万事西欧をよしとする時流の中で、漢学者はやむをえず姿を潜めていた。あくまでも蕭条たる漢学界であったが、1879年以後相継いで発布された「教育大旨」・「幼学綱要」から文部省の教育政策が儒教主義へ転換するようになった。

黄遵憲が日本に滞在したのは1877年から1882年までの間で、ちょうど漢学を蘇らせようとした時期に当たる。当時の日本の文人、特に漢学者、漢詩人たちは、中国崇拜の傾向が強く、清国公使館の人々と積極的に交わりを求めた。黄と交わりを持った日本人には、榎本武揚、蒲生重章、重野安繹、宮島誠一郎、南摩綱紀、亀谷省軒、巖谷一六、青山延寿、小野湖山、岡千仞、森槐南、日下部鳴鶴、佐野常民などがいた<sup>27</sup>。黄と彼らの交遊は、学問や文学を通して深まっていった。黄は『日本国志』を執筆した際には、修史館で勤務した宮島誠一郎らを通して多量の基本資料を得た<sup>28</sup>。黄遵憲の幕末志士に対する認識はこれらの漢学者から受けた影響が大きかったと考えられる。以下、いくつか例を挙げておく。

当時の日本では、蒲生重章の『近世偉人伝』（1877-1895）、佐治次太郎の『愛国叢談』（1878）、小笠原勝修の『愛国偉績』（1875-1877）など明治維新前後の英雄志士たちの功績を称賛する著書が刊行されていた。黄遵憲と蒲生重章との関係は親しかった。2人はよく文章を交換し、お互いに学問を磨き合った。黄は1879年に、蒲生重章の『近世偉人伝』第四編を読み、以下のように感想を述べている。

閻を叩いて哀告す 九天の神に  
幾箇か孤忠の草莽の臣あり  
臣が頭は断じ尽さるるも 臣が筆はあり  
尊王は終に読書の人に頼る

私のこの詩は実に蒲生秀実、高山彦九郎らのためにつくったのである。徳川氏が儒学を崇めてから、読書して大義を明らかにしたものは、武門が政権を専にする非を初めて知った。源光圀が大日本史を作ったころもちは、尊王のためであったが、將軍の親族であるため、大いに論ずるというわけにもいかなかった。やがて布衣蒲生とか高山というものが出来、はじめて論説を書き、藩を廃そうとした。尊王攘夷の論がおこると、たちまち四方これに和した。幕府では、厳しくこれらのものを捕まえた。死刑になったものも数しらずいたが、結局成功した。これと

<sup>26</sup> 町田三郎『明治の漢学者たち』（研文出版、1998年、4頁）。

<sup>27</sup> 1968年に紹介された『黄遵憲与日本友人筆談遺稿』からも彼の交遊関係を窺うことができる。（鄭子瑜、実藤惠秀編校『黄遵憲与日本友人筆談遺稿』早稲田大学東洋文学研究会、1968年）。

<sup>28</sup> 笈久美子「黄遵憲と宮島誠一郎：日・清政府の官僚文人交遊の一軌跡」（『中国文学報』50、1995年）。

いうのも、まことに漢学の力によるものである<sup>29</sup>。

『近世偉人伝』は、江戸時代の後期から明治時代の初めに至る「偉人」の伝記を漢文で記したもので、合わせて32冊が刊行されている。各冊に十余名の伝記を記載する。第四編の内容は江戸末期の細井平洲ら儒学者の伝記である。黄はこれを読み、幕末志士特に高山彦九郎、蒲生秀実らの儒学者が明治維新において果たした役割が大きかったと述べ、それは実に漢学の力によるものであったと強調している。

黄遵憲との関係が深かった人物のうち、岡千仞は『愛国叢談』と『愛国偉績』の序を著している。岡は幕末志士の尊王攘夷、倒幕運動の経過を述べ、薩摩、長州の志士たちが幕府を倒すため、死を恐れない精神を持ったことを称賛し、尊王攘夷の最終の目的は幕府を転覆することであったと主張している。また、岡は『尊王紀事』(1882)を著し、幕末の志士たちの功績を肯定した。黄遵憲は「評『愛国叢談序』」において、岡千仞のこの見方に対し、「この論は極めて見識がある」と評価した<sup>30</sup>。ここから、黄が岡千仞の幕末志士観に対し、賛成の立場に立っていたことが窺える。因みに、梁啓超は『時務報』に発表した「記東侠」において、『近世偉人伝』と『尊王紀事』を読んだことがあると言っている<sup>31</sup>。従って、この二冊の本は当時中国の知識人の間においても広く読まれただろうと考えられる。

また、黄遵憲は1878年、児玉士常の『中学習字本』という手本に序を書いている。同書の吉田松陰に関する一篇を高く評価し、幕末には「二三有志の士は、慨然として王政復古を企て、天下の豪傑は靡然としてそれに従い、一人が唱導し、百人がそれに呼応し、命を惜しまず、危険を顧ず、遂に幕府を転覆し、明治中興の業を為した」と述べている<sup>32</sup>。

以上から、外交官として日本に滞在し、日本の漢学者と交わった時に、黄遵憲の幕末志士に対する認識がすでに形成されていることがわかる。

<sup>29</sup> 『『近世偉人伝』第四編書後』(1879年12月)、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』上、244頁。原文は以下の通り。

「叩閭哀告九天神、幾箇孤忠草莽臣。斷尽臣頭臣筆在、尊王終頼讀書人”。余之此詩、盖為蒲生秀実、高山彦九郎諸人作也。日本自徳川崇儒、讀書明大義者、始知権門專柄之非。源光国作『日本史』、意欲尊王、顧身属懿親、未敢昌言。其後蒲生、高山諸子、始公然著論廢藩。尊王攘夷之議起、一倡百和。幕府嚴捕之、身伏蕭釜者不可勝数。然卒頼以成功、實漢学之力也。」

引用した詩及び解説は後に黄遵憲の『日本雑事詩』に収録された。この部分の翻訳は実藤恵秀、豊田穰の訳を参照した。黄遵憲著、実藤恵秀・豊田穰訳『日本雑事詩』(平凡社、1968年、121-122頁)。

<sup>30</sup> 「評『愛国叢談序』」(1879-1881年の間)、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』上、267頁。

<sup>31</sup> 「記東侠」(『時務報』39、1897年9月17日。のち中華書局編輯部編『強学報・時務報』3、中華書局、1991年、2635頁)。

<sup>32</sup> 『『中学習字本』序』(1878年11月)、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』上、241-242頁。原文は以下の通り。

「吉田者、亦節烈士……徳川氏末造、二三有志之士、慨然思尊王復古、天下豪傑、靡然従之、一唱而和百、粉首碎身、不所顧恤、卒覆幕府、以蔚成明治中興之業。」

## II. 維新派による「任侠」思想の展開とその性格

### 1. 維新派による「任侠」思想の展開

本章では、康有為ら維新派が『日本国志』の影響で形成した幕末志士観が如何に展開していたのかについて述べることにしたい。

1895年、康有為が北京で強学会を組織した時に、黄遵憲は友人の呉徳瀟と一緒に康を訪れた。康は「首をあげ、足を膝に加え、天下の事を縦談」する黄に強い印象を持ち、「それ以後朝夕往来し、語らないことはない」有様であったと回想している<sup>33</sup>。1898年、康有為は「日本雑事詩序」を著した。その中で、「(黄は)日本の沿革、政教、学俗を論じ、遂に『日本国志』を書き上げた。これは我が国人を驚かせ、非常に深い意味を持った。これがあれば、一国の政治を任されても、外交交渉に於いて独りで堂々と渡り合うことも簡単にできるであろう」と『日本国志』を高く評価している<sup>34</sup>。

康有為が長女康同薇の『日本変法由遊俠義憤攷』のために書いた序から、康の幕末志士観を窺うことができる。『日本変法由遊俠義憤攷』は高山彦九郎、蒲生秀実ら幕末志士たちの「尊王攘夷」や「倒幕」活動を紹介した書である。康はその序において、明治維新の成功は、幕末志士たちの「義士遊俠の熱血漲力」によって為されたと述べる。そして、中国では歴史上国のために命を惜しまない任侠たちが数多くいたが、現在はそのような任侠がいないことを歎き、司馬遷の「遊俠列伝」を継ごうとする志があつて、康同薇に命じてこの書を編纂させたと述べている<sup>35</sup>。これらのことから、少数の幕末志士が明治維新を成功させたのであり、彼らは昔から中国に存在していた「任侠」に等しい存在である、と康有為が捉えていたことが分かる。また、康は自ら吉田松陰を任じ<sup>36</sup>、弟子たちの改革の志を鼓舞しようとしていた<sup>37</sup>。

維新派によって創刊された雑誌は、「任侠」思想を広める役割も果たした。黄遵憲、汪康年らが上海で創刊した維新派の機関誌『時務報』(1896.8-1898.8)、康有為がマカオで創刊した『知新報』(1897.2-1901.1)、唐才常、楊毓麟らが湖南で主筆した『湘学報』(1897.4-1898.8)、唐才常、譚嗣

<sup>33</sup> 康有為「人境廬詩草序」(1908年6月22日)、前掲『国家清史編纂委員会文献叢刊 黄遵憲全集』上、67頁。原文は以下の通り。

「吾游上海、開強学会、公度以道員奏派辦蘇州通商事、扶吳明府徳瀟叩門來訪。公度昂首加足于膝、縦談天下事……自是朝夕過從、無所不語。」

<sup>34</sup> 「日本雑事詩序」(1898年初)(康有為撰、姜義華・張栄華編校『国家清史編纂委員会・文献叢刊康有為全集』4、中国人民大学出版社、2007年、1頁)。原文は以下の通り。

「而講其沿革、政教、学俗、以成其『国志』、而聳吾国人、用意尤深、宜其達政專對綽綽也。」

<sup>35</sup> 康同薇『日本変法由遊俠義憤攷』(大同譯書局、1898年、序言)。

<sup>36</sup> 宮崎滔天「東京だより」(1899年、宮崎龍介・小野川秀美編『宮崎滔天全集』5、平凡社、1971-1976年、240頁)。

<sup>37</sup> 梁啓超は、日本亡命後に品川弥二郎に宛てた書簡で、万木草堂で勉強していた時、吉田松陰の著書『幽室文稿』を必読書として康有為に指定され、「いささかでも意気消沈するようなことがあったら、必ずこの書を読むように。暮鼓晨鐘(朝夕の寺の鐘)より修養に役立つ」と教えられたこととともに、自ら名を「吉田晋」と改めたと書き送っている。(丁文江・趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』1、岩波書店、2004年、277-278頁)。

同らが湖南で創刊した『湘報』(1898.3-1898.10)、梁啓超が日本亡命後日本で創刊した『清議報』(1898.12-1901.12)などが挙げられる。以下は戊戌変法期にそれらの雑誌に掲載された「任侠」に関する論説のうち主なものを紹介する。

まず、1891年康有為の万木草堂に入り、康の弟子となった麦孟華が『時務報』に発表した「尊侠篇」が挙げられる。麦は「尊侠篇」において以下のように述べている。「以前『史記』遊俠列伝を読んだとき、なぜ司馬遷は朱家、郭解らのような匹夫の勇を興味津々に語ったのかと不思議に思っていた。昔はそのように思っていたが、今から見ると、侠というのは、その身を犠牲にしてその心を生かす。その財を散らしてその力を集める。その家を亡くしてその国を守る。人が侠でなければ仁でないであり、国は侠がいなければ国ではない」。そして、中国の戦国時代以前は侠を以て立国したが、それ以後、屢々迫害を受けて、清末に至ってはすでにいないと述べる。またアメリカは「大俠ワシントン」、プロイセンは「大俠ビスマルク」、フランスは「大俠ティエール」、日本は「大俠西郷隆盛、大久保利通」らがいなければ、強国になれなかったと主張している<sup>38</sup>。このように、麦は日本だけでなく、アメリカ、プロイセン、フランスなども少数の「大俠」がいなければ、強国になれなかった、つまり国の興亡は少数の「大俠」によって決まると考えた。

また、康同薇は1897年、『知新報』に「論中国之衰由於士氣不振」を発表した。ここでいう「士氣」は処士の気力を指すと考えられる。康同薇は「人材は国の礎であり、士は人材の宅である。士が盛んになればその国は強くなる。士が不足すればその国は災難に巻き込まれる」と述べる。明治維新を成功させ、日本を強国にさせたのは「士氣が高まった」ためであると言い、「日本の士は中国學術の緒余を得ただけでこれほど強くなったが、中国の士は数千年来の聖教（儒学）、伝授は失っていないのにこれほど弱い」と捉え、その原因は「士氣不振」にあるとした<sup>39</sup>。ここで注意すべきは、康同薇が日本の幕末志士思想の由来は「中国の學術」すなわち儒教であると考えた点である。この考えは前述した黄遵憲の説を受け継いだと考えられる。

<sup>38</sup> 麦孟華「尊侠篇」(『時務報』32、1897年7月10日。のち前掲『強学報・時務報』3、2141-2148頁)。原文は以下の通り。

「往讀太史公書遊俠列傳。窃怪朱家郭解。匹夫之勇。而史公何以津津道之。心向往之如是。由今觀之。而知俠也者。死其身以生其心。散其財以聚其力。亡其家以存其国。人而不俠。時曰不仁。国而無俠。時曰不国。昔中国以俠立国者也。」

また、『特務報』の主筆を担当し、『日本国志』を広く世に宣伝し、黄遵憲と親交を結ぶに至った梁啓超は『時務報』で「記東俠」、『知新報』で「三先生」などの文章を発表して、「任侠」を唱えた。梁啓超の「任侠」主張については、前掲拙稿「梁啓超の近代国民思想の形成：『任侠』から『新民』へ」を参照されたい。

<sup>39</sup> 康同薇「論中国之衰由於士氣不振」(『知新報』32、1897年9月26日。のち澳門基金会『知新報』上、上海社会科学院出版社、1996年、346-347頁)。原文は以下の通り。

「夫才者国之基也。士者才之宅也。士盛則其国強。士寡則其国殃……明治維新。肇有端略。皆諸士之功也。于是日本維新政治。更正条約。頒定憲法。以張国法……威振海外。名振英法。推原所自。豈非士氣之振致哉。夫日本之士。得中国學術之緒余而若此。我中国之士。受数千年之聖教。師傳未失而若彼……士氣之不振也。苟安幸免。心私志散。以釀成此不痛不痒之世界耳。」

『知新報』の撰述者黎祖健は同じく1897年同報で「説任篇」を発表した。黎祖健は1894年に康有為の木野草堂に入り、康有為の弟子となった。黎は「説任篇」の冒頭において、「羽珍龔子(龔自珍)には『尊任篇』があり、その任というのは、俠である。即ち墨子の一派である。司馬遷の「遊俠列伝」は墨子派の庶子である……儒家の書に明哲保身と言う。『礼運』では聖人が身を安全に護る所以であるとあるので、墨学は「任」を尊んで儒学は「任」を尊んでないと言われる」と述べる。しかし、実際に中国古代の聖人である孔子、孟子、伊尹たちは皆「任」であったと説く。続いて、儒学の「任」は墨学の「任」と同じく天下を救うことを宗旨とするが、墨学の「任」は「遊俠列伝」に言う「わずかな恨みも必ず晴らす、人の急と難を救う」朱家・郭解らの遊俠を意味するのに対し、儒教の「任」は孔子、孟子のような「道」を以て天下を守ることでであると主張している。このように、黎は儒教の「任侠」は個人の恩恵や恨みによって動くのではなく、国家を守るために行動する資質を持っていると理解する。しかし、当時の中国では儒学を修める人の中に「任」を尊ぶ者は一人もいないと述べる。それは、宋以後の儒学者がもっぱら「義理」、「省身克己」を重視し、ほかのことに無関心であったからであると論じている<sup>40</sup>。

ここで、龔自珍について少し言及しておきたい。龔自珍(1792-1841)は中国の改良主義の先駆者と言われる。梁啓超は「光緒年間のいわゆる新学家たちは、たいていだけれども龔自珍を崇拝する時期を一度は通過したものである」と回想している<sup>41</sup>。龔は19世紀前半衰えた中国社会の気風、「士気」が振るわないことを痛感し、濟世の「士」である「任侠」を早く出現させなければならないと説き、「尊任篇」を著したと考えられる<sup>42</sup>。

ほかに、『知新報』に掲載された「任侠」を唱える論説は少なくなかった。例えば、「述日本維新以前尊王之事」(1898)、黎祖健の「若為六極之一説」(1898)、「亡国責在疆臣説」(1899)、「保身保家説」(1899)、「尊任侠」(1899)などを発表している。また、1897年に同報で発表された「侠会章程」の冒頭に、「侠は天下の親友である。その心は至誠、至公で、天下を以て己が任と為す……侠会を立て、天下の友と為す。亡国を挽回しようとする」とあり、侠会の設立も計画されていたようである<sup>43</sup>。

唐才常も「任侠」を唱える論説を書いている。日清戦争前の1894年に書いた「日本寛永以来大事述自叙」の中で、「昔魏源の著した『海国図志』は、5洲のことを網羅しているが、日本に関する記述だけは詳しくない。最近著された『日本地理兵要』、『日本新政考』、『日本図経』は、非常に完備していると言えるが、その変法(明治維新)の時に遭った困難については一つも触れなかった。

<sup>40</sup> 黎祖健「説任篇」(『知新報』25、1897年9月26日。のち『知新報』上、236、250頁)。

<sup>41</sup> 梁啓超著、小野和子訳注『清代學術概論』(平凡社、1974年、242頁)。

<sup>42</sup> 龔自珍『龔自珍全集』上(中華書局、1974年、85-86頁)。

<sup>43</sup> 「侠会章程」(『知新報』38、1897年11月24日。のち前掲『知新報』上、446頁)。原文は以下の通り。  
「俠者天下之至友也。其心至誠至公。以天下為己任……立一俠会。以為天下友表。挽狂瀾於既倒。」

ただ黄遵憲の『日本国志』だけがほかの書より詳しいが、残念なのは、流行が非常に少なく、中国国内でそれを見た者は少ないだろう」と唐才常は歎いている。そして、明治維新を成功させた「任侠」は「民権を尊び、士気を広め、生死を軽んじ、約束を重んじる」資質を持っていると述べ、「昔司馬遷は布衣の権利を伸ばし、遊侠の気を重視したが、それが日本に準則として用いられたのは、不思議だ」と述べている<sup>44</sup>。ここから、中国古代の「任侠」の気風を継いだので日本は強くなったと、唐才常が考えたことが窺える。

唐才常はまた「論熱力」において、「日本と我々は同文同種である……二三俠士仁人が必死の力を出して、衆議を排し、今日の維新之治が為された」と主張する<sup>45</sup>。林子平、吉田松陰、高山彦九郎、蒲生秀実、頼山陽ら「俠士」が万死を辞さず、幕府を転覆させたと強調するとともに、湖南省を日本の薩摩に喩えた。因みに、康有為の弟子で、横浜の大同学校で教鞭を執った徐勤は1898年、唐に送った書簡の中で、日本の処士は仁侠であると述べている<sup>46</sup>。

湖南維新派の主要人物である樊鍾は1898年『湘報』に発表した「上陳中丞書」において、「今日の人は、日本の興盛、日本の任侠を言うのを好む。任とは諸侯の食客である……今日黄金台<sup>47</sup>を築き、天下の豪傑を招き、天下の言論を開き、天下の機略を得る」ことをしなければならぬと主張している<sup>48</sup>。樊は日本の幕末志士を中国古代の「諸侯の食客」と考え、中国におけるそのような人々を結合していくことが重要だと主張している。

さらに、譚嗣同は『仁学』において、「墨学は二派に分けられる。一に曰く、『任侠』で、私は仁

<sup>44</sup> 唐才常「日本寛永以来大事述自叙」（『唐才常集』、中華書局、1980年、97-99頁）。原文は以下の通り。  
「昔魏舍人源輯『海国図志』、網羅五洲、獨於日本、闕焉不詳。及近人所著『日本地理兵要』、『日本新政考』、『日本図経』、燦然大備、顧未一及其変法情形艱險萬状。惟黄遵憲『日本国志』較他書為詳備、而孤本流傳、海内獲見者蓋寡、余窃憾焉……尊民権、伸士気、輕生死、思然諾……昔太史公奮布衣之権、重遊侠之気、憫然為日本貽之準則、異哉！」

唐才常はまた、「日本之変法、俱一二人奇人俠士為之、遂決然毅然捨身度世、以扞天下之危難、無所於茶」と言い、明治維新は少数の「奇人俠士」によって為されたと考えた。「辨惑」（『湘報』50、1898年5月3日、のち『湘報』報館編『中国近代期刊彙刊第2輯 湘報』上、中華書局、2006年、416頁）。

<sup>45</sup> 唐才常「論熱力上」（『湘報』6、1898年3月12日、のち前掲『中国近代期刊彙刊第2輯 湘報』上、42頁）。原文は以下の通り。

「若夫日本與我。国同洲。書同文……全恃二三俠士仁人。出死力。排衆議。以成今日維新之治。」

<sup>46</sup> 唐才常「論興亞義會」（『湘報』65、1898年5月20日、のち前掲『中国近代期刊彙刊第2輯 湘報』上、565頁）。

唐はまた「俠客篇」（1898）において、「我聞日本俠、義憤干風雷、幕府権已傾、群藩力亦摧、鬩然振新学、金石為之開」と言い、幕末志士の功績を謳った。唐才常「俠客篇」、前掲『唐才常集』、262頁。

<sup>47</sup> 黄金台は戦国時代の燕の昭王が築いた台。台上に千金を置いて天下の賢者を招いた。招賢台ともいう。

<sup>48</sup> 樊鍾「上陳中丞書」（『湘報』90、1898年6月18日、のち前掲『中国近代期刊彙刊第2輯 湘報』上）、814頁。原文は以下の通り。

「今之人好言日本之興。好言日本任侠。乃其任則諸侯之客也……今不築黄金以召天下之豪傑。開天下之言議。致天下之智計……」

という……一に曰く『格致』で、私は学という」と述べている<sup>49</sup>。譚はまた西漢が「内和外威」に達したのは「遊侠」に負うところが大きいと述べ、「中国と至近で、極めて倣うべきなのは日本にほかならない。その变法自強の効果は、劍を帯びて遊歴する習慣からきた。彼らは悲歌叱咤し、殺人報仇の気概をもって改革の機運を鼓吹した」といった<sup>50</sup>。このように、譚は「任侠」は日本が強くなった原因だと見なしている。また、維新変法が失敗したあと、譚嗣同は梁啓超と一緒に日本大使館の助けを受けて日本に亡命することを勧められたが、譚は梁にこのように語った。「行く者がいなければ将来を図ることはできない。死ぬ者がいなければ、聖主（光緒帝）に報いることはできない。今南海（康有為）の生死は不明であるから、程嬰と杵臼<sup>51</sup>、月照と西郷隆盛の役割は、私とあなたで分かち合おう」<sup>52</sup>。こうして、譚は梁に日本亡命を勧め、自分は逮捕・処刑される決意を告げたのである。

以上、戊戌変法期に維新派が「任侠」を論じた例を挙げた。これらは氷山の一角に過ぎず、ほかにも多く類似の内容を説く論説が発表された。

## 2. 清末における「任侠」思想の性格

清末に維新派が提唱した「任侠」思想の性格は以下のようにまとめることができる。

第一に、黄遵憲の『日本国志』に描かれた幕末志士観から受けた影響が大きいこと。康有為ら維新派は少数の幕末志士が明治維新を成功させた、という黄遵憲の幕末志士観を受け継いだ。彼らは幕末志士を「任侠」として捉え、中国でもこのような「任侠」が少数いれば、維新変革を成功することができるかと認識した。康有為ら維新派は、日本の「任侠」の中でも、『日本国志』が取り上げた幕末尊王家の先駆者たち、儒学を修めた高山彦九郎、蒲生秀実、佐久間象山、吉田松陰らを最も評価した。

第二に、西洋と日本を強くした「任侠」は、中国の歴史に存在したと強調すること。日本において、「侠客」、「任侠」、男伊達等々と称される人々が出現したのは、江戸時代前期17世紀である。旗本奴に対抗して、市井のもめ事を解決する義侠心溢れる町奴がその起源だとされる<sup>53</sup>。彼らは幕末志士とは異なる存在であった。しかし、清末の知識人は中華思想の影響を受けて、どんなものに対

<sup>49</sup> 譚嗣同著、蔡尚思・方行編『譚嗣同全集』（中華書局、1998年、自序）。原文は以下の通り。

「墨有兩派：一曰「任侠」、吾所謂仁也……一曰「格致」、吾所謂学。」

<sup>50</sup> 前掲『譚嗣同全集』、344頁。原文は以下の通り。

「西漢民情易上達而守令莫敢肆、匈奴数犯辺而終驅之於漠北、内和外威、号称一治。彼吏士之忌者誰歟？未必非游侠之力也。与中国至近而亟当效法者、莫如日本。其变法自強之效、亦由其俗好带劍行游、悲歌叱咤、挟其殺人報仇之氣概、出而鼓更化之機也。」

<sup>51</sup> 程嬰、杵臼は春秋時代の晋の義士である。趙氏の孤児趙武を救うために、公孫杵臼は替え玉の子を趙武に見せかけて殺された。本物の趙武は程嬰が山中に隠れて育てた。15年後に韓厥の進言によって景公は趙武と程嬰を召し、逆に敵の屠岸賈一族を滅ぼした。趙武の成人を見とどけて程嬰は自殺した。

<sup>52</sup> 「譚嗣同傳」（梁啓超『飲冰室合集』6、『飲冰室專集』1、中華書局、2011年、109頁）。原文は以下の通り。「曰不有行者無以図将来。不有死者無以酬聖主。今南海之生死未卜。程嬰杵臼月照西郷。吾与足下分任之。」

<sup>53</sup> 井波律子『中国侠客列伝』（講談社、2011年、1頁）。

しても中国固有なものと解釈しようとする思想的傾向があるがために、日本の幕末志士を中国の古代に存在した「任侠」に当てはめたのである。それは、「義」、「至誠」を重視し、目標を達成するためには、犠牲となることも厭わなかった幕末志士の性格は、生と死を軽んじ、約束、恩情を重んじ、人を窮境から救い出すという「任侠」の性格と重なる所が多かったからである。また、日本と西洋の学問の根源は中国古代の經典に発すると主張した黄遵憲と同じように、当時のアメリカ、フランス、プロイセンら諸強国でも少数の「任侠」があるがために国が強くなったと清末の知識人たちは認識した。

第三に、儒学を修め、国のために動く「任侠」が最も重視されること。中国歴史上、「俠者」が出現したのは、諸国が分立した春秋時代以降である。司馬遷の著した「遊俠列伝」に、わずかな恨みも必ず晴らし、身の危険をかえりみず人の窮境を救い、武行侠勇を誇る朱家・郭解らの遊俠が称賛されている。清末になると、このような個人の恩恵や、恨みによって動く者たちより、自分の生死を顧ず、国を守るために行動する「任侠」のほうが重視されている。また、儒学はもともと「任侠」を主張したことも強調されている。秦以前の儒学者は「任侠」を崇拜したが、それ以後、「任侠」は統治者に迫害されたためいなくなったとして、儒教を修める人は国の為動く「任侠」に戻らなければならないと呼びかけた。

#### おわりに

本稿は、日清戦争後、日本を手本として中国で維新変革を行おうとした康有為ら維新派が黄遵憲の『日本国志』に描かれた幕末志士を中国の歴史上に存在した「任侠」として捉え、少数の「任侠」による維新変革の実現という認識を持つに至った過程を検討した。あわせてこの「任侠」思想を維新派がどのようにして広めていったかを考察した。

清末中国人による日本研究の代表作と見なされてきた黄遵憲の『日本国志』の歴史的意義は、当時の中国だけでなく、現在でも高く評価されている。しかし、同書における黄の幕末志士観が康有為ら維新派にもたらした日本認識の歪みは無視できないと考えられる。黄遵憲が渡日したのは1877年から1882年の間であり、その時の日本はまだ改革の途上にあった。明治維新は一定の成果が見られたとはいえ、長い間「天朝上国」と自慢し、日本を「蕞爾小国」と見なした中国人が注目することはなかった。外交官として日本に渡った黄遵憲が中華文化の優越感をもったのは当然である。彼は明治維新後の日本社会の発展を肯定し、『日本国志』を著し、当時の清国でも日本と同じような維新変革を行うべきだと主張しながらも、日本の学問ひいては西洋の学問の源は中国の經典からきたと主張した。黄がこのような認識を持っても不思議ではない。

問題とすべきなのは、『日本国志』が中国で流布したのが日清戦争直後である。黄が描いたのは1880年代初頭までの近代化途上にある日本であり、それ以後、日本で打ち出された「軍人勅諭」(1882年)、「教育勅語」(1890年)など近代国民国家を推進する一連の政策は含まれていなかった。この



ため、日本に対する認識は不完全だと考えられる。また、康有為ら維新派が黄遵憲の幕末志士観から影響を受け、少数の「任侠」の役割をあまりに過大視する認識は、維新変法期だけではなく、その後の勤王蜂起期における中国人の日本認識に多大な影響を与えた。ある意味で黄遵憲の幕末志士観は維新派の日本認識に歪みを生じさせたと考えられる。